倫風宏話

上廣榮治名誉会長　最期の教え

「大自然の摂理」に沿って、より善く生きよ

上廣哲治

すでにお知らせいたしましたように、一月十一日午前五時十六分、上廣榮治名誉会長は八十一年の生涯の幕を閉じ、先師のもとへと旅立ちました。

昭和四十七（一九七二）年十月六日、上廣哲彦初代会長の急逝により、翌七日に、三十五歳の若さで急遽会長職を継踵し、平成二十八（二〇一六）年六月二十日に七十九歳で退任するまで、実に四十四年もの長きに亘り、会長職の重責を担ってまいりました。実践倫理の理論を考究し、率先垂範の実践に努め、道を示しつづけたのです。まさに倫理実践という一本道を駆け抜けた悔いなき生涯でありました。

亡くなる半年ほど前に呼吸器系の病のため、酸素ボンベの助けを借りる生活となりました。部屋からの移動や外出時は苦しそうに見えましたが、意欲は衰えず、年明けの「年賀式」は会友の皆さま方にお目にかかり、お話しすることを何よりの楽しみとして節制し、準備にいそしんでおりました。その姿は、時に鬼気迫るものがございましたが、誠に残念ながらその思いは叶いませんでした。

療養の日々を重ねるなかで、会長としての心構えなどさまざまなことを二人で話し合いました。

ある夜、「平成」時代の終焉と自分の生涯の終わりを重ね合わせたのでしょうか、「結局、われわれはある時代に生まれ、その時代の空気を呼吸して、その時代のなかで生涯を終えていくんだな」と申しました。そして、「〈吾人は須く現代を超越せざるべからず〉ということだよ」と付け加えたのです。

その言葉は、作家・高山樗牛の有名な言葉、「此の世の真相を知らむと欲せば、吾人は須く現代を超越せざるべからず」です。私たちはその時代を覆う常識、価値観に無意識のうちに影響されて生きている。しかし、世界の真実を知ろうと思うならば、時代を超越した視点に立って物事を見なければならないという意味です。この言葉を聞いたとき私は、名誉会長がどのような姿勢で時代と向き合って生きてこられたのか、理解できたような気がいたしました。

会長職就任当時の日本経済は、高度成長を成し遂げて安定成長に入った頃でした。その後、オイルショックやプラザ合意など紆余曲折を経て、バブル期を迎えました。やがて、それも破綻、「失われた二十年」という低迷期からリーマンショックを乗り越えて今日の実感の伴わない好況へとつづきます。好況や不況の波に翻弄されるなかで、私たちは知らぬ間に、経済成長と幸福を一体のものであるかのように思う風潮が生まれました。暮らしの経済的な安定は必要ですが、経済的に豊かになることが必ずしも幸福と一致するものではありません。

名誉会長は、講演の折々に「経済的な豊かさに惑わされて真の幸福を見失ってはならない」と訴えつづけました。時代の風潮に異を唱え、わが会の唱える「家庭愛和」の真の意義に多くの方々に気付いていただきたかったからです。

時代の影響を受けるのは、わが会の理論や教えも同じです。教えの本質は変わることはないのに、そ

の理解の仕方が微妙に異なってくる。物の姿形は変わらないのに、日差しの変化によって見え方が違ってくる現象に似ています。しかし見え方が少し違ったからといって、その本質まで変化したように誤解されては困ります。このようなことが起きないように、名誉会長は主だった理論や教えを整理して、その本質を明らかにした文書を残しておこうという構想を抱きました。

しかし、いざまとめようにも、他の会務に忙殺され、書くための時間を十分にとることができません。実際に取りかかれるようになったのは、会誌『倫風』創刊の平成八（一九九六）年で、すでに還暦を迎えておりました。「新・実践倫理講座」と題して筆を起こしたこの連載は十年の間、毎月書き継がれ、筆を擱いたときにはすでに古希を数えておりました。この連載をまとめたのが、『実践倫理講座』全三巻（「天の巻」「地の巻」「人の巻」）です。「天の巻」の「はじめに」では次のように書かれています。

「講座の目指すところは（略）実践倫理の理論を、より深く、より正しく理解していただくことでした。（略）まず取り上げたのは、実践倫理の教えとして使われている数々の用語でした。同じ用語でも人によって解釈が違っては困ります。ともに倫理を実践し、これを広く普及していくためには（略）実践倫理の正しい理解を共有することが不可欠だと考えたからです」

「天の巻」では、実践倫理の主な教え二十二項目を取り上げ、その理念を詳細に解き明かしています。『実践倫理講座』の土台とも言うべき巻です。ところが題辞に使われた「大自然の摂理」については、全巻を貫いて言及されてはいるものの、項目としては取り上げられておりません。名誉会長は年来それを気にかけておりました。その思いが本年、「年賀式」の「挨拶」に結実して、「大自然の摂理」が主題となったのです。『実践倫理講座』のミッシングリンク（失われた環）が見出され、すべてが繋がり完結したのです。年賀式の「名誉会長挨拶」こそが、私たちに伝えたかった最期の教え、最期の言葉だったのではないでしょうか。

「私たちは大自然の〈より善く生きよ〉という意志に導かれて進化を重ね、そして生まれてきたのです。〈より善く生きる〉ことこそが、私たちに与えられた使命なのです。（略）実践とは、〈大自然の摂理〉に沿って、より善く生きることです」

平成時代最後の「平成三十一年」に生涯を閉じた名誉会長は、「昭和」「平成」という二つの時代を、「大自然の摂理」に生き貫いた一生であったのです。

最後に、ひと言お詫びを申し上げねばなりません。年賀式において私は、名誉会長がまだ存命であるかのように申し上げて、式を進めました。しかし、式の始まる数時間前にはすでに永眠されたのです。葬儀を終えるまでは公にしてはならないとの厳命があり、明らかにできませんでした。謹んでここにお伝え申し上げ、お詫びとさせていただきます。

当日、込み上がる感情を抑えて式を無事に進めることができたのは、名誉会長というより、父が、優しく手を差し伸べ、私を支えてくれていたからです。日頃から大変厳しく、笑顔も稀にしか見せない父の、最後に示してくれた息子へのあたたかい「励まし」だったと、感謝しております。最後の最後まで、感謝の念を抱ける親に育てられたこと、私は本当に果報者だと心からありがたく思っております。

ここでもう一度、私たちは、「〈大自然の摂理〉に沿って、より善く生きよ」との名誉会長最期の教えを灯として、新たな気持ちで「今日一日」の実践に励んでまいろうではありませんか。

※生前のご厚誼、ご高配に対しまして、衷心より厚く御礼申し上げます。